

## 答 辞

本日は私たち卒業生のために、このような心のこもった式を挙げていただき、まことにありがとうございます。また、ご多忙の中をご出席くださいましたご来賓の皆さま、校長先生をはじめ先生方、保護者の皆さま、並びに在校生の皆さんに、卒業生一同心よりお礼申し上げます。

今朝、制服を着ていつものように鏡の前に立ちました。これを着るのは今日が最後なのだと思うのと同時に、これを最初に着た入学式の日を思い出しました。

新しい生活に、新しい人たち。どんな出会いがあるのか、何が起こるのか不安で、ピンとした制服のように緊張していたあの日。今ではすっかり馴染んで私の体の一部になっている、その姿を見て、いつの間にか二高生になっていたのだなと実感しました。

美術コースで過ごした高校三年間は、刺激的でとても新鮮でした。

美術の授業は、作品を仕上げると、必ず講評といって皆の作品を並べて先生から一つ一つコメントをいただきます。それがはじめはとても恥ずかしいものでした。

絵は一瞬で人が分かってしまいます。その人の長所も短所も、怠けも努力も、外と中身のギャップも見抜かれてしまいます。他人を知ることで、自分を知るのです。

美術コース生の仲間は、コンプレックスも含めて私のことを知っていて、飾らずにつきあえる特別な存在です。個性が豊かで、絵で人を楽しませた

り感動させたりできる、そういう尊敬できる仲間に出会えたことがとても幸せです。

美術の授業で学んだ、計画し、作り、伝える、という基本は、生徒会活動においても活かされました。一年生の時から実行委員として裏方を見てきた私は、自分たちの手で生徒会を作りたいという思いを持ち、生徒会長になりました。

印象に残っているのは、去年の予餞会での出来事です。卒業を前にした三年生を送る学校行事、予餞会。順調に準備が進んでいると思っていた矢先、予定していた先生方によるバンド演奏が、事情があって中止になったと聞かされました。

メインイベント中止の知らせに、生徒会のメンバーも一気に落ち込みました。私たちには、どうしてもあきらめられない理由がありました。この企画は私だけの夢ではなく、生徒会の先輩方の二年越しの夢でした。先生方が卒業ソングを歌ってくれる機会は予餞会でしかなく、二高の先生方のあたたかさが伝わってきて、会場が一つになります。私は、そんな予餞会に託された先輩方の思いをどうしても受け継ぎたいという気持ちがありました。

「ここで中途半端にしてしまったら、これからずっと中途半端なものしか作れなくなる。」

私は悩んだ末に、生徒会の先生に、勇気を出して、自分たちの思いを言葉にしてぶつけました。

翌日、奇跡が起こりました。

生徒会の先生がもう一度交渉してくださり、先生方のバンド演奏が復活したのです。そして迎えた予餞会。ラストの先生バンドは一番の盛り上がり

を見せてくれました。泣いている先輩もたくさんいて、会のあと、「ありがとう」と言ってくれました。

先生、あの時は本当にありがとうございました。私たちの熱意をくんで学校が動いてくれたことが、その後の私たちにとってどんなに大きな励みとなったかわかりません。生徒の思いをちゃんと受け止めてくれる先生がいる、実現のために協力してくれる仲間がいる。それを実感したこの思い出は決して忘れません。

生徒会長になるなんて、入学当初の私はみじんも思っていませんでした。それでも気づけば飛び込んでいたのは、担任の先生やクラスの友だちなど、生徒会が身近に感じられる環境にいたからだと思います。生徒会長になることは、当時の自分が今いる立ち位置で問いかけたとき、抵抗無く自然に出てきた夢でした。まわりのみんなに背中を押されて踏み出したこの夢のおかげで、私の高校生活は劇的に変わりました。

「夢の持ち方が分からない」「夢を持つにはどうしたらいいでしょうか」  
若者たちはよく言います。夢が持てないのは、社会が悪いから、政治のせいだ、とか、他人のせいにする人もいます。

コピーライターの糸井重里さんは、あるテレビ番組の対談で、こんなことをおっしゃっていました。

「僕は小さい夢ほどいいと思っている。本気になれるから。夢が大事なんじゃなくて、本気が大事。問題は夢とかっていう以上に、今いる位置で

の問いかけの方が、やれることもイメージできることも増やしてくれる。」

私には常に小さな夢がありました。作品を完成させる、学校の行事を成功させる、友だちの誕生日を全力で祝って喜ばせたい……その夢のために本気になることができました。本当に本気になったときには、風の中に出ていかなければなりません。思ってもみななかった痛い目に遭ってしまったり、もしくは思ってもみななかった奇跡に出会えたり。本気になったときにしか得られないものがあるのだと実感することができました。これが、私の高校生活の財産です。

そして私だけではなく、ここにいる卒業生の皆が、大切な本気の瞬間を二高で過ごしました。

作品づくりという孤独な作業に向き合い続けたこと  
受験勉強の日々をもがき苦しみながら、あきらめずに共に闘ったこと  
悩みを打ち明ける友だちを放っておけなくて、一緒になって泣いたこと  
就職試験を控えて、自分の進路をつきつけられ、葛藤したこと  
キャプテンとしてチームのために何ができるか悩んだこと  
ベンチでチームに大声で声援を送ったこと

学生時代に本気になれたこと、夢を見させてもらったこと……このかけがえのない日々を、ずっと忘れたくありません。

十年後、二十年後、未来が何もかも明るいとは言

えるはずもないし、私たちは、全てを簡単に受け入れられるほど、もう子どもではありません。

それでも、何かを信じて、何かに感動して、何か夢見るものがなければ、やはり生きていくことはできないと私は思います。しかし、私たちはもう大丈夫です。なぜなら、私たちは自分の未来を想像する楽しさ、自分の未来を想像する自信を、すでに手にしているからです。過去の自分が、未来の自分をきっと支えてくれると信じています。

当たり前だと思っている出来事の多くが決して当たり前ではなく、多くの皆さまの见えない手、やさしい手に支えられているということをお忘れず、まだここにはない、新しい出会いのためにさようならを言います。私たちの高校生活を支えてくれた皆さまに、心から感謝いたします。

四十周年の節目を迎える工大二高が、これからも生徒の夢に寄り添い、本気を応援してくれるあたたかい学校でありますように、そしてここに集ってくださった皆様お一人おひとりが、ご健康で幸せでありますようにお祈りし、お別れの言葉いたします。

平成二十七年三月二日

第四十回卒業生代表 上野 柚子